

# 第11回 震災研究連絡会

弘前大学のネットワークで震災研究を広げよう。



日時 2012年7月6日(金) 18:00~

場所 コラボ弘大1F コミュニティ・スペース

司会 白石 睦弥 (しらいし・むつみ) 弘前大学特別研究員

18:00~18:50 新城 榮一 (しんじょう・えいいち)

株式会社ニセンエックス代表取締役CEO

いわきパイロットオフィスインキュベーションマネージャー

「福島県の復興について

—インキュベーションマネージャーからの視点—

18:50~19:40 柳引 素夫 (くしびき・もとお)

弘前大学地域社会研究会/NPO 法人青森県防災士会 理事

「防災と共助—青森県防災士会の取り組み—

19:40~20:00 意見・情報交換

※震災対応や震災研究に興味のある方はどなたでも参加・聴講できます。

※当日、報告の後に、震災に関する情報・意見交換を行います。情報をお持ちの方はこの機会にご紹介ください。

※連絡会終了後、有志の懇親会を予定しています。

第10回震災研究連絡会は、2012年5月8日(火)に行われた。

【報告者】

佐藤 魂夫 (さとう・たまお) 理工学研究科教授, 地震火山観測所所長

「青森県東方沖で発生する最大クラスの地震と津波の想定」

小岩 直人 (こいわ・なおと) 教育学部教授

「津波堆積物からわかるもの」

【概要】

佐藤教授は、東北地方太平洋沖地震では「貞観タイプ」「明治三陸タイプ」の2種類の地震が連動するという想定外の状況が発生し、巨大地震と巨大津波の発生につながったと指摘した。以前なら陸上データしか得られず、今回の地震も「地殻のずれは最大20m」ということに落ち着きかねなかった。しかし近年、海底データが豊富に得られるようになり、その海底データを精査した結果、深いところでは80m近いずれが起きていた可能性があるという。

また、過去の地震解析では「広い面積が均質にすべる」という状況を想定していたが、今回の地震は局所的に「大すべり」するエリアと「超大すべり」するエリアがあることが分かった。南海トラフで今後、発生し得る地震の想定に、この「超大すべり」地域を「1カ所」「2カ所」とあちこちに組み込むモデルをつくると、今までの想定を大きく超える津波の発生もあり得ることが分かったという。現段階で、このような「大すべり」「超大すべり」が、宮城県沖固有の現象なのか、他の海域でも起き得るのか、まだ分かっておらず、南海沿岸で、この「想定を大きく超える津波」が本当に発生し得るのかも分からない。

同じモデルを青森県沖に適用する、つまり「従来より震源域を細分化し、不均質なすべり/大すべり/超大すべりが発生するモデル」を考えると、今回の地震と同じM9程度でも、従来型のモデルに基づく試算(波高10m)を大幅に上回る、波高20m以上の津波も起こり得るといえる。ただ、「大すべり」「超大すべり」が、青森県沖で起きのか分からないため、佐藤教授は「数字が一人歩きするのも怖い」と懸念された。いずれにしても「最新の知見に基づくとは言い難い」モデルが、今も原子力施設の防災議論で用いられている—という指摘は、重く受け止めるべきだと感じた。

小岩教授は津波堆積物の専門ではないと断りながら、基礎的かつ分かりやすい《頭の枠組み》の説明をされた。津波堆積物の専門家は、国内には10人もいないという。このため知見が十分に集まらず、論点の整理も必ずしも進んでいないのが実情とのこと。

津波は「砂」「泥・海水」「津波石」という3種類のを陸上に運ぶ。津波の大きさが、堆積物の厚さに関係するとは限らない。また、津波堆積物を厳密に、台風による洪水や高波に伴う堆積物と区別するのは至難の業で、さまざまな条件から消去法で判定していくしかない。また、仙台平野など現在の海岸線自体が1000年前、2000年前とは異なっている事例もある。従って、現在の地形や海岸線を前提に「過去の津波の浸入範囲」を安易に推定するのは危険だということ。中でも、珊瑚礁の一部が破壊された津波石は、年代測定結果や質量・体積の推定、津波の高さが分かっている例があり、津波のパワーを知るには非常に有効な指標となる。

ともあれ、津波堆積物については今後、さらなる情報を集め、さらに空間的に整理することが重要な段階にあるという。(K)

第12回連絡会は2012年9月、コラボ弘大1Fのコミュニティ・スペースにて開催予定。

【連絡先】

弘前大学大学院地域社会研究科 檜楨貢研究室(教員室2)

Tel 0172-39-3938(内線3938) Mail himaki@cc.hirosaki-u.ac.jp